

幼児期の人間関係の発達と支援 — 他者感情理解のプロセスに着目して —

Development of young children's relationships with others
- A review on understanding others' emotion -

杉村 智子*

Tomoko Sugimura

We reviewed experimental studies examining young children's (ages 3-6 years) understanding of emotion to identify important changes in their ability to infer others' feelings. We categorized the research into five types according to task demands: (1) categorization and naming of basic facial expressions, (2) inference based on situational cue, (3) inference based on both facial expression and situational cue, (4) understanding of possible discrepancies between the outward expression and the actual feeling, and (5) inference based on both situational cue and people's preference. Meta-analysis revealed five components of emotion comprehension. Finally, we discuss developmental changes in cognitive processing when inferring others' feelings during the preschool age and effective support aimed at helping young children adapt to relationships with others during elementary school education.

1. はじめに

2017年に幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂が告示され、就学前までに育っているべき姿が明確に打ち出されることとなった。幼稚園教育要領（文部科学省，2017）を例にとると、“第1章 総則”の中の、“第1 幼稚園教育の基本”に続く第2として、改訂前には存在しなかった“幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」”についての記述が大幅に追加された。その中で、人間関係に関わる事項としては、幼児期の終わりまでに育まれるべき協同性・道徳性・規範意識の基本となる子どもの姿として、他者の思いや考えに理解や共感をする、様々な人の立場になってその人の気持ちを考えて関わるということが強調されている。

本稿では、発達心理学における社会的情動発達の研究のうち、幼児期（3－6歳）の他者感情の理解に関する研究の知見に焦点をあて、特に就学前の段階（5－6歳）における、他者の感情を理解する能力の育ちの様相を詳細に検討していく。そのことによって、新しい幼稚園教育要領等に掲げられた幼児期の終わりまでに育まれるべき姿としての、“他者の思いや考えに理解や共感をする”や、“様々な人の立場になってその人の気持ちを考えて関わる”についての、具体的で詳細な姿や内容を明らかにすることができ、保育場面での援助に繋げていくことができるであろう。なお、他者感情理解の発達に関する研究は諸外国でも多く行われているが、文化圏や言語圏において発達の様相に差が見られる（e.g., Wellman, Cross, & Watson, 2001; Naito & Toyama, 2006）ことから、本稿では、主に日本の幼児を対象とした研究についてとりあげることとする。

* こども学科 教授

2. 幼児期における他者感情を理解・推測する能力とその発達過程

ここでは、幼児期における他者感情理解や感情推測能力に焦点をあてた発達心理学的研究をレビューし、そこから見えてくる、他者感情を理解・推測する能力の発達プロセスを記述していく。すなわち、どのような現象を指して、“他者感情を理解している”とみなすのか、また、それが何歳頃に可能となるのかについての知見をまとめ、そこから発達のプロセスについて推測していく。感情理解に関する研究には、森野（2010）や近藤（2014a）がレビューしているように、社会的スキルや他の認知的要因との関連性を検討する研究等、感情理解以外の側面も合わせて検討しているものも多いが、感情推測能力を中心的に検討している研究をとりあげることとする。

感情推測能力を測る課題には様々なタイプがあり、その難易度や対象年齢も様々であるが、感情推測の課題をおおよそその発達順序にそって5つのタイプにわけてレビューを行う。また、具体的に詳細な課題内容と記述統計データを提示することによって、何歳頃からどのタイプの感情推測が可能かという点を明確に記述することとする。

（1）表情情報を手掛かりとする感情推測

低年齢の子どもも対象としても行われる感情推測課題として、言語提示による表情識別課題（以下、表情識別課題）を用いた研究がある。表情識別課題とは、表情を描いた複数枚の線画を子どもに提示し、「嬉しい時の顔はどれですか？」等の質問をして、子どもに嬉しい顔であると思う線画を指さして答えさせるというものである。この課題では、“嬉しい”、“悲しい”等の、感情を表すことばに合致する表情を理解している必要がある。

まず、櫻庭・今泉（2001）は、2歳児40名、3歳児68名、4歳児26名を対象として、マンガのキャラクターを用いた4つの表情図（喜び、悲しみ、怒り、驚き）から、例えば、嬉しい時の顔はどれかを選択させる課題を行った。その結果、それぞれの表情図における平均正答率は、下からの年齢順に、喜び：63%，86%，92%，悲しみ：60%，82%，90%，怒り：46%，86%，94%，驚き：29%，59%，77%，であった。また、菊池（2004）は、3－4歳児23名、4－5歳児18名、5－6歳児17名を対象として、4つの表情（喜び、悲しみ、怒り、無表情）から、例えば、嬉しい時の顔はどれかを選択させる課題を行った。それにあたって、4つの表情が、a）簡単な線画、b）イラスト、c）成人の写真、d）調査対象児自身の写真、の4種類の図版を比較した。喜び、悲しみ、怒り、の3つの平均正答率は、4種類の図版毎で下からの年齢順に、a）88%，91%，100%，b）84%，95%，100%，c）66%，82%，91%，d）49%，66%，75%，であった。

これらの研究から、嬉しい、悲しい、等のことばが、どんな表情（感情）を表しているかについては、3～6割の2歳児、4歳を越えると、8～9割の子どもが理解しているということがいえる。ただし、表情や図版の種類によっては理解しにくいものもあり、櫻庭・今泉（2001）では“驚き”の正答率が低く、菊池（2004）では、簡略化した線画の表情よりも、実際の人物写真の表情の理解が難しかった。“驚き”のような感情語は、“喜び”と比較すると多様な解釈可能性があるためであろう。また、子どもにとって実際の人物写真は情報量が多く、表情の特徴を抽出するのが困難であったことも推測される。

次に、表情情報を手掛かりとする感情推測課題として、表情図版提示による表情命名課題（以下、表情命名課題）がある。この課題は、表情図版や表情写真を提示し、その感情についてことばで答えさせるものである。まず、浜名・針生（2015）は、2－3歳児26名、3－4歳児30名、4－5歳児29名、5－6歳児30名を対象として、成人の表情写真6種類（喜び、悲しみ、

怒り、驚き、恐怖、嫌悪）をみせて、写真の人物の気持ちを尋ねた。その結果、“喜び”の表情写真をみて、“嬉しい”等の感情をことばで表現できた者の割合は、下からの年齢順に、15%，63%，88%，72%であった。また、“悲しみ”では、12%，35%，45%，34%，“怒り”では、50%，67%，69%，62%であった。また、東山（2005）は、4－5歳児72名を対象とし、5種類（喜び、悲しみ、怒り、驚き、恐怖）の表情をしている写真の人物の気持ちを尋ねたところ、正答数（5点満点）の平均得点は3.72（ $SD=1.01$ ）であった。東山（2005）では、併せて5点満点の表情識別課題も行っているが、この課題の平均得点は4.19（ $SD=1.08$ ）であった。

以上みてきたような、表情識別課題と表情命名課題とを比較すると、前者は2、3歳の低年齢の子どもでも比較的正答率が高いが、後者は5、6歳の年長児であってもそれほど正答率が高くない。すなわち、嬉しい、悲しい、等のことばが、どんな表情（感情）を表しているか理解することと、表情をみて、その感情を、嬉しい、悲しい等のことばで表現できることの難易度にはかなりの差があり、後者については、年長児であっても容易ではないことがわかる。また、近藤（2014a）も指摘しているように、感情の種類によってもその表出の困難度は異なる。例えば、“嬉しい”というポジティブな感情語については年長児であれば高い割合で表出できるが、“悲しみ”や“怒り”のネガティブな感情については、その違いについてことばで表現することが難しいといえる。

（2）状況情報を手掛かりとする感情推測

状況情報を手掛かりとして感情を推測させる課題（以下、状況課題とする）は、紙芝居やビデオや人形劇などを使用して仮想場面を示し、主人公の感情を推測させるという方法をとる。例えば、“主人公が楽しみにしていた遠足が雨で中止になった”等の例話を提示し、その時の主人公の気持ちを表す表情を表情図から選択させたり、ことばで言うように求める。この課題では、目に見える形で示されていた表情を手掛かりとする感情推測課題と異なり、状況という複雑な情報からの推測が必要となる。

まず、表情図から主人公の気持を表す表情を選択させる状況課題を行った山村・辻本・中谷（2011）は、4－5歳児38名、5－6歳児41名を対象として、例えば、“喜び”の感情を推測させる課題では、“主人公が欲しかった玩具を、お父さんが買ってきてくれた”状況を紙芝居でみせたあと、主人公がどのような表情になるかを、5枚の表情図（喜び、悲しみ、怒り、恐れ、無表情）から選択させた。課題は、4つの感情について課題ずつ、計4課題であった。想定された感情と選択された表情図が一致すれば2点、ネガティブの範囲で一致（例えば、想定された感情は“悲しみ”であったが“恐れ”を選択）した場合を1点とし、2点満点の得点についての4つの課題の平均得点は、4－5歳児が1.61（ $SD=0.46$ ）、5－6歳児1.79（ $SD=0.24$ ）であった。吉川・島（2017）も、3－4歳児38名、4－5歳児38名、5－6歳児41名を対象として、山村ら（2011）と類似した手続きで、状況を紙芝居でみせたあと、主人公がどのような表情になるかを、4枚の表情図（喜び、悲しみ、怒り、恐れ）から選択させた。課題は、喜び、悲しみ、怒り、恐れ、に関する課題を計5課題（“喜び”のみ2課題）を行った。想定された感情と選択された表情図が一致した場合を1点（“喜び”は各課題0.5点）とし、4点満点の得点について平均得点は、3－4歳児1.18（ $SD=1.17$ ）、4－5歳児2.53（ $SD=0.87$ ）、5－6歳児2.64（ $SD=1.08$ ）であった。

次に、主人公の気持ちをことばで言うように求めた研究には、笹屋（1997）や菊池（2006）がある。笹屋（1997）は、4歳、5歳、6歳（小1）、8歳（小3）、9歳（小5）、12歳（中1）、

大学生、それぞれ20名ずつを対象として、例えば、“お父さんが誕生日にケーキを買ってきてくれた”状況を実演のVTRでみせ、主人公が表情を表出する前にVTRをとめ、主人公がこのあとのような気持ちになるかを尋ねた。課題は、喜び、悲しみ、怒り、に関するものが3課題ずつ、計9課題であった。表出された言語反応が感情語として適切かどうかを0、1、2の2点満点で評定し、9課題の平均を年齢で比較したところ、下からの年齢順に、約0.6点、1.4点、1.6点、1.75点、1.8点、1.8点、1.8点であった。菊池（2006）は、3歳児23名、4歳児18名、5歳児17名を対象として、笹屋と類似した状況課題を行った。この研究では、口頭で例話をするという形で課題を行い、VTRや紙芝居等は用いなかった。喜び、悲しみ、怒り、に関するものを1課題ずつ行い、表出された言語反応が感情語として適切かどうかを0、1、2の2点満点で評定し、3課題の合計得点（6点満点）を年齢で比較したところ、おおよそ、3歳児2.0点、4歳児3.5点、5歳児4.7点、であった。

以上、みてきたように、状況情報のみを手掛かりとする感情推論は、研究によってばらつきはみられるが、3歳ではまだ難しく、4歳で徐々に可能となり、5－6歳であれば7、8割が可能になるといえるだろう。上述した4つの研究結果を比較するために、5歳児または5－6歳児の時点での得点の獲得率を算出したところ、山村ら（2011）では90%、吉川・島（2017）で66%、笹屋（1997）で70%、菊池（2006）で78%あった。表情図の選択で感情推測を調べた前者2つの間の差が大きいのは、山村ら（2011）では、悲しみ、怒り、等のネガティブの感情についてはネガティブなものを選択した場合には得点を与えているのに対し、吉川・島（2017）では、悲しみ、怒り等の感情も区別して答えた場合のみを正答としたためであると考えられる。このことから、①で述べた表情からの感情推論と同様、状況情報から感情を推測する場合も、ネガティブな感情をより細かく区別して推測することは、年長児であっても容易なことではないと推測できる。

以上、状況情報のみを手掛かりとする感情推論課題による研究をみてきたが、現実場面では、多くの場合は状況に対する主人公の反応や表情がともない、それを含めたうえでの感情推論がなされる。次に、この観点からの研究をみていく。

（3）状況情報と表情情報を手掛かりとする感情推測

ある状況によってある感情が起こる場合、その状況と感情（表情）が一致している場合もあるが、現実にはそれが不一致である場合も多くある。例えば、プレゼントをもらった主人公が悲しそうにしている場合、また、転んで怪我した主人公が笑っている場合等、状況と感情が一致しない場合、子どもはこの事態をどのように解釈し、どのように感情を推測するのだろうか。

状況情報と表情情報が矛盾する場合の感情推測を検討した久保（1982）は、4歳、5歳、6歳（小1）、7歳（小2）、大学生、それぞれ20名ずつ（大学生のみ10名）を対象として、例えば、“おやつにアイスクリームをもらった”状況にもかかわらず主人公が悲しそうな表情をしている図版をみせ、主人公の気持ちとそう考えた理由を尋ねた。その回答に基づき、対象者を主に一方型（状況か表情のどちらか一方の情報から推測する）と、全体像構成型（お腹が痛くて食べられないから悲しい等、状況と表情に矛盾がない文脈を作って推測する）の2つに分類した。この2つの型の人数の割合（3課題の平均）は、下からの年齢順に、一方型は47%、25%、10%、7%、0%、全体像構成型は27%、57%、80%、90%、97%、であった。この結果から、4歳では、状況もしくは表情のどちらか一方を手掛かりとして推測する傾向があるが、5歳の半数、6歳では8割が、両方の情報に矛盾がないような文脈を考えて推測を行うようになることがわかる。

また、笹屋 (1997) は、4 歳、5 歳、6 歳 (小 1)、8 歳 (小 3)、9 歳 (小 5)、12 歳 (中 1)、大学生、それぞれ 20 名ずつを対象として、例えば、“お父さんが誕生日にケーキを買ってきてくれた” 状況にもかかわらず主人公が怒っている VTR をみせ、その時の主人公の気持ちと、そう考えた理由を尋ねた。そして、その回答に基づき対象者を、表情型 (顔が怒っているから怒っている等の表情に準拠した判断)、状況型 (ケーキをもらって嬉しい等の状況に準拠した判断)、統合型 (チョコのケーキを頼んだのにイチゴのケーキだったから怒っている等の両方の情報を統合した判断) 二分類した。この 3 つの型の人数の割合は、下からの年齢順に、表情型は 60%, 35%, 10%, 5%, 0%, 0%, 0%, 状況型は 5%, 15%, 25%, 25%, 40%, 20%, 5%, 統合型は 0%, 5%, 35%, 55%, 60%, 80%, 95% であった。なお、この分類は 3 種類の課題を行い、2 課題以上に同じ型がみられた者について、その型に分類している。この研究では、久保 (1982) の一方型を、さらに細かく表情型と状況型に分類しており、表情型は年齢とともに減少し、状況型は、統合型がでてくるまでは徐々に増加しその後減少していくことが明らかになった。

以上の研究結果から、まず、4 歳くらいまでは、状況よりも表情の情報のみを手掛かりとした感情推論を行うことがわかる。また、5 - 6 歳になると表情よりも状況情報のほうを手掛かりとすることが多くなり、同時に、両方の情報に矛盾がないような文脈を生成し、それをもとにした推論が可能となりはじめるといえる。以上のことから、5 - 6 歳頃から、状況と表情の情報が一致しない、すなわち、嬉しいような状況であっても悲しい表情をすることもあること、さらに、表情は本当の感情を表していない場合もあること、等についての理解が進んでいくと推測できる。

(4) 偽装表情と隠された感情の理解

ここでは、(3) において言及した、“表情は本当の感情を表していない場合もあることの理解” をもう少し発展させた形である、“偽装表情の理解” について検討した研究をみていく。これらの研究は、“本当の感情を隠すためにはそれとは一致しない表情をする” こと (表情偽装) の理解や、“偽装表情をしている人物の本当の感情を推測する” 能力を検討した研究に大別される。

まず、澤田 (1997) は、4 歳前半児、4 歳後半児、6 歳児を対象として、主人公の本当の感情と偽装感情を推測させた。例えば、「ビスケットが好きであると主人公と嫌いである友達が、おやつにビスケットをもらった。この時、主人公は本当の気持ちを友達に隠したいと思っている。」という例話を人形劇で提示したあと、主人公の本当の気持ちと、主人公は友達の前でどのような顔をするかについて、嬉しそうな顔、悲しそうな顔、普通の顔、の 3 つから選択させた。この例話の場合、主人公の本当の気持ちは“嬉しそうな顔”、主人公が友達の前でする顔 (偽装表情) は、“悲しそうな顔” または “普通の顔” が正答となる。全部で 8 種類の課題を行い、正答数の平均値を年齢で比較した。その結果、本当の気持ちについての平均正答数 (8 点満点) は、4 歳前半児 7.70 ($SD=1.31$)、4 歳後半児 8.00 ($SD=0.00$)、6 歳児 8.00 ($SD=0.00$)、偽装表情の平均正答数は、4 歳前半児 1.55 ($SD=1.74$)、4 歳後半児 3.47 ($SD=2.17$)、6 歳児 5.15 ($SD=2.33$) であった。また、東山 (2007) は、3 歳児、4 歳児、5 歳児、6 歳児を各 30 名ずつ対象として、澤田 (1997) と類似した偽装表情を推測させる課題を 1 課題行った結果、正しく偽装表情を推測できた人数の割合は、下からの年齢順に、3.3%、3.3%、10.0%、46.7%、であった。以上のような研究結果から、偽装表情については 6 歳児くらいから理解できるものが増えてくること

がわかる。

次に、表情を偽装している人物の本当の感情を推測する能力を調べた溝川・子安（2011）は、5－6歳児102名に対して、主人公が本当の感情を隠したがつている例話を状況図をみせながら話し、その時の主人公の気持ちを4つの表情図から選択させる課題（Pons, Harris, & deRosnay, 2004）を4課題行った。例えば、“Aはたくさんのビー玉を持っており、ビー玉をひとつも持っていない主人公のことをからかっている。主人公は心の中でどう思っているかをAに知られたくないので、ほほえんでいる”という例話を状況図とともに話した後、主人公は本当は心の中でどう思っているかについて、4つの表情図から選択させた。その結果、偽装表情にまどわされることなく推論できたものを1点とし、4課題の合計点の平均値を算出したところ、2.28（ $SD=1.27$ ）であった。また、伊藤（1997）は、4－5歳児16名、5－6歳児15名を対象として“クジを引きで友達はクジに当たり、主人公は外れてしまったが、主人公がほほえんでいる”という場面をビデオでみせたあと、主人公の気持ちについて4つの表情図から選択させる課題を1課題行った。その結果、正しく本当の感情（悲しい）を選択した人数の割合は、4－5歳児43.8%、5－6歳児73.3%であった。

これらの研究から、表情を偽装している人物の本当の感情を推測する能力についても、本当の感情を隠すための偽装表情の理解と同様、5－6歳頃から理解できる者が増加する傾向にあるが、課題の文脈によって喚起される理解過程が異なり、それが正答率等に反映されている可能性もある。例えば、上述した溝川・子安（2011）の課題の文脈では、「主人公は、“自分のことをからかうAに自分は平気であると思わせたい”のでほほえんでいるが、本当は悲しい」というように、主人公が他者の信念を操作するため表情を偽装していることを理解する必要がある。しかし、伊藤（1997）の文脈では、主人公がクジに当たった友達の信念を操作する理由が明示されておらず、“主人公はクジがはずれたことをがまんしてほほえんでいるが、本当は悲しい”というように、主人公の心的状態のみを考慮しても理解可能である。このように、一見すると同じように見える課題であっても、他者に事実とは異なることを思い込ませる、つまり、他者の信念操作を伴うような複雑な感情推論過程が必要となる課題は、5－6歳児であっても正答率はそれほど高くはないと考えられる。

（5）状況情報と人物の特性情報を手掛かりとする感情推測

（3）と（4）においてみてきたような、“表情は人の感情を推測するためにはそれほど確かな手掛かりとはならない”ことへの気づきとともに発達してくると考えられるのが、状況情報と併せて人物の特性情報を手掛かりとする感情推測である。人物の特性情報として、人物の好みや性格に焦点をあてた研究（e.g., 朝生, 1987; 谷脇・藤田, 2012）や、その人物の過去経験に焦点をあてた研究（e.g., 麻生・丸野, 2007, 2010）があるが、ここでは、前者についてみていく。これらの研究では、特に、調査対象児自身とは反対の好みをもつ人物の感情について推測させる課題を行っている。その理由は、対象者自身と同じ嗜好性をもつ人物についての感情推測は、自分の好みから生じる感情をそのまま答えれば正答となってしまい、本当に他者の特性を手掛かりとして推測しているのかわからないからである。

朝生（1987）は、3－4歳、4－5歳、5－6歳各30名ずつを対象として、自分自身の好みとは反対の好みをもつ他者の感情推測課題を行った。あらかじめ、例えば調査対象者の“カブト虫についての好み”を調べておき、カブト虫が好きである対象者については「主人公はカブト虫をみるといつも逃げてしまう。ある日主人公の所に友達がやってきて、カブト虫をあげるよといっ

てカブト虫を差し出す」という例話を、状況を表す絵（人物の表情は描かれていない）を提示しながらきかせた。その後、a) 主人公の行動の質問（主人公はカブト虫を見るとどうするのか）、b) 主人公の特性推測の質問（どうして主人公はカブト虫を見ると逃げるのか）、c) 主人公の感情推測（カブト虫をもらった主人公はどんな気持か）、を行い、c) では、4枚の表情図（嬉しい、悲しい、怒っている、普通）から、主人公の気持であると思うものを選択させた。この3つの回答をもとに、対象者自身の好み（カブト虫が好き）をそのまま主人公にもあてはめて推測した場合を“自己準拠反応”、主人公の行動（カブト虫をみると逃げる）から特性（カブト虫が嫌い）を理解したうえで主人公の感情（悲しい、又は、怒っている）を適切に推測した場合を“他者準拠反応”に分類した。そして、同様の課題を4種類行った結果について、4つ全てに自己準拠反応をした者を自己準拠型、自己準拠反応と他者準拠反応の両方が混ざっている者を混合型、4つ全てに他者準拠反応をした者を他者準拠型とし、それぞれの年齢で、この3つの型の割合を調べた。その結果、自己準拠型は3-4歳67%、4-5歳63%、5-6歳13%、混合型は3-4歳30%、4-5歳30%、5-6歳43%、他者準拠型は3-4歳3%、4-5歳7%、5-6歳43%、であった。さらに、この研究では、自己準拠型を示した4-5歳児18名を対象として、主人公の特性をよく理解させたうえで感情推測を行わせた。その結果、他者準拠反応になったものは22%、主人公の特性を憶えてはいるが自己準拠反応をした者は28%、主人公の特性を憶えておらず自己準拠反応をした者は50%であった。

谷脇・藤田（2012）は、4歳未満7名、4歳-4歳半10名、4歳半-5歳26名、5歳5歳半40名、5歳半-6歳31名、6歳-6歳半22名、6歳半以上11名、を対象として、自分自身とは異なる好みをもつ他者の感情推測課題を行った。その内容は朝生（1987）とほぼ同様であり、対象者の反応についても朝生（1987）と類似した基準で主に以下のように分類された。a) 主人公の特性（好み）を理解できず自分自身の好みで推測する、b) 主人公の特性を理解しているが自分自身の好みで推測する、c) 主人公の特性をもとに主人公の感情を推測する。それぞれに分類された対象者の割合は、下からの年齢順で、a) では40%、10%、4%、10%、6%、6%、0%、b) では20%、40%、36%、23%、19%、14%、9%、c) では20%、10%、36%、41%、39%、55%、73%、であった。

以上の結果から、自分自身とは異なる特性をもった他者について、その他者の特性に基づいた他者の感情を推測することは、5-6歳児であっても容易ではなく、特に4歳台の子どもは、自分自身の特性をあてはめて他者の感情を推測する傾向にあるといえるだろう。また、朝生（1987）も指摘しているように、4-5歳では、自分とは異なる他者の特性を正しく理解していたとしても、その情報を他者の感情推測には利用できない段階があるといえるだろう。

3. 幼児期における他者感情理解の発達の様相と支援

Pons, Harris, & Rosnay（2004）は、幼児期を対象とした数多くの感情推論研究のデータを分析・統合し、感情理解能力をささえる9つの構成要素（Component）と、その具体的内容、およびその年齢段階を示した。例えば、Component I は、3-4歳までに可能となる“表情の分類と命名”で、その具体的内容は、“基本感情（喜び、悲しみ、恐れ、怒り）の表情図を見て例えばどれが喜びの表情かを区別できる、ある表情図について嬉しい顔等の命名ができる”というものである。また、Component VII は、4-6歳から可能となる“表情と本当の感情の不一致”であり、その内容は“表情と本当の感情は必ずしも一致しないことを理解しはじめる”となっている。しかし、Pons, et al.（2004）の示した9つの構成要素は、欧米諸国の研究データに基づ

いており、本邦の研究データは反映されていない。

従って、2 においてレビューを行った本邦の子どもの対象とした研究データをもとに、Pons,et al. (2004) と同じような、感情理解能力をささえる構成要素の記述を試みた。表1は、感情理解能力の要素とその具体的内容、それが可能となるおおよその年齢段階を示したものである。まず、(1) から (5) までの5つの要素と具体的内容を記述しているが、これは2 における(1) から (5) の内容と対応しており、番号順におおよその発達順序を想定している。年齢段階については、あくまでも目安であり、個人差や現実場面を加味するとかなりのずれが生じることが予想される。なぜなら、氏家 (2010) も指摘しているように、調査場面における感情理解の様相を記述してもそれは後付けであって、現実には起こっている感情理解の最中にはそれを意識化することも言語化することもできないからである。よって、この年齢段階は、その状況を外から見たときにある程度意識化して説明できる段階を表していると捉えたほうがよいであろう（例えば3歳児は、表1の(4)に示した偽装表情について意識化や説明ができる段階にはないが、現実場面においては偽装表情を理解しているかのような3歳児の振る舞いを観察することができる）。

以下に、表1についての考察を行っていく。畑山 (2010) が指摘しているように、感情理解の研究では、感情理解の異なった側面が細切れに並列的に検討される傾向にあった。しかし、その側面を発達の要素としてつなげてみていくことで、感情の性質に関する概念変化、感情理解能力と他の認知的スキルとの関連性、教育への示唆等を記述することができるだろう。

まず、概念変化についてであるが、感情理解能力の発達とともに、感情推測のためにどのような情報をどの程度信頼するかについての概念変化がおきていることがわかる。まず、要素の(1)と(2)のレベルでは、感情と表情、感情とそれを引き起こした状況は1対1で結びついている、つまり、表情や状況が、感情を予測するための確実な手掛かりであることの認識から感情理解がはじまるといえる。次に、(3)と(4)で、表情は必ずしも本当の感情を表すものではない、つまり、“表情は人の感情を推測するためにはそれほど確かな手掛かりとはならない”こと

表1 感情理解の要素とおおよその年齢段階

感情理解の要素	具体的内容	年齢段階	備考
(1) 表情と感情との結びつきの理解	・基本感情を表すことばが、どんな表情(感情)を表すのかがわかる ・表情が表す感情をことばで言うことができる	2-3歳から 3-4歳から	・人物写真の表情の理解は遅い ・様々なネガティブ感情のことばによる区別は年長でも難しい
(2) 状況と感情との因果関係の理解	・“こんな時は普通こんな気持ちになる”という一般論としての状況と感情の因果関係がわかる	4歳頃から	・ネガティブ感情の種類を区別して推測することは年長でも難しい
(3) 状況と表情が矛盾する事態の理解	・表情は本当の感情を表していない場合もあることに気づく ・表情と状況の情報に矛盾がないような文脈を考えて推測できる	5-6歳から	・表情を重視して推測する(4歳) ・状況を重視して推測する(4-5歳)
(4) 偽装表情と隠された感情の理解	・本当の感情を隠すために表情を偽装する場合があることに気づく ・表情を偽装している人物の本当の感情を推測できる	5-6歳から	・偽装者の心的状態のみを考慮した理解(4-5歳) ・偽装者には他者の信念を操作する意図があることの理解(5-6歳)
(5) 人物の特性情報(好み、性格、過去経験)を考慮した感情理解	・自分とは異なる他者の特性を理解し、特性が異なれば同じ状況でも異なった感情が生じることに気づく ・状況の手掛かりと、人物特性の手掛かりの両方から感情を推測できる	5-6歳から	・自分と特性の違う他者の特性を理解できないことがある(4歳) ・他者の特性は理解できるが、それを感情推測に利用することが難しい(4-5歳)

に気づく。さらに（５）では、状況の手掛かりについてもまた、確実な手掛かりではないことに気づき、同時に人物特性を手掛かりとすることで、確からしい感情を推測できることを理解する。このように、３－６歳の間に、感情を推測するための情報の不確実性の概念を徐々に獲得していき、近藤（2014b）の研究が示しているように、５－６歳児頃に、“他者の特性がわからないときにはその感情はわからない”という、他者感情は予測不能であるという側面にも気づきはじめると考えられる。

次に、他の認知的スキルと関連性について考察する。感情推測能力と他の認知的スキルの関連性、特に、心の理論研究（心の理論研究については、子安・木下（1997）を参照）における一次的信念（誤った信念）の理解との関係を検討した研究（e.g., 東山, 2001; 宮本, 1998; 森野, 2005）は、２で紹介した研究（e.g., 東山, 2001; 吉川・島, 2017）も含めて数多くなされている。これらについては、感情推測能力と一次的信念の理解には関連性があるとする研究（宮本, 1998; 森野, 2005）や、ないとする研究（東山, 2001, 2005; 吉川・島, 2017）もあり、それらの結果を統合するような考察がなされてこなかった。しかし、それぞれの研究が、感情推測能力として、（１）から（５）のうちのどの要素を対象としているかをみると、関連性がみられた宮本（1998）は（４）を、森野（2005）は（２）と（５）を対象とし、関連性がみられなかった吉川・島（2017）は（２）を、東山（2001, 2005）は（１）と（２）を対象としていた。つまり、要素（１）と（２）のような、表情と感情との結びつきや、状況と表情の因果関係がわかるレベルでの感情推測能力は一次的信念の理解とは関連がないことがわかる。これに対して、（４）や（５）のレベルでの感情推測能力は一次的信念の理解と関連があるといえる。しかしそれは、関連というよりもむしろ、（５）であれば、“自分と心的状態が異なる他者の考え”の理解、（４）であれば、“他者の信念操作についての意図”の理解、のように、一次的信念や二次的信念（二次的信念については、林（2002）を参照）の理解のプロセスがこのレベルでの感情推論のプロセスには含まれていると考えたほうが適切であろう。

ここから、冒頭でも述べたように、小学校教育につながる幼児期の終わりまでに育っているべき姿として“他者の考えや気持を理解して関わること”が挙げられているが、これを促すための５－６歳児に対する保育者の認識や援助について考えていく。

まず、要素（３）、（４）、（５）に示したような、５－６歳におけるおおよその他者感情理解のレベルを想定した、またはそれに近づけるような支援が必要であろう。５－６歳児は、目に見える表情や状況と感情の状態が必ずしも一致しないこと、また、他者の特性（好みや性格）というそれ以前の他者との関わりから得た様々な情報が、感情を知るためには有効であることを理解しはじめる。そのため、溝川・子安（2011）も指摘しているように、“強がって悲しみをこらえている友人の本当の感情（悲しみ）を察してなぐさめる”といった、より複雑な感情の推測に根ざした行動判断もできるようになる段階にある。しかし、このような理解や行動が可能になるためには、状況と感情の矛盾や葛藤を克服し、他者の過去を含めた背景にも思いを巡らせる必要がある。これらを促すためには、感情を推測するための手掛かりの多様性や、また、いずれの手掛かりも絶対的なものではないことを示唆する等、あえて、迷いや葛藤の起きる状況に対面させたり、それについて考えさせることも必要となってくるであろう。

次に、自分や他者のネガティブな感情についてのことばによる感情表現を促すような支援が必要であろう。表情をことばで表すという要素（１）であっても、それがネガティブな感情である場合は年長の幼児であっても細分化した表現をすることは難しい。杵田（2014）が示しているように、悲しみ、怒り、恐れ、驚きのネガティブな感情に対しては、４－５歳児は“いや”という１

つのことばで表現する傾向があるが、5－6歳児では“いや”は減少し、“こわい”や“びっくりする”など細分化した感情語を言う者が増えてくる。しかし、仲（2010）も指摘しているように、幼児にとって感情をことばで表すことは難しく、特にネガティブな感情を表すことばのバリエーションは小学校6年間を通して徐々に増加していく。このことをふまえ、5－6歳児の段階でも、自分や友達のネガティブな感情をあらわす多様なことばへの気づきを促す必要があるだろう。友達の感情を、“いやだ”と単純に表すのではなく、“悲しんでいた”、“怒っていた”、“怖がっていた”、というように、より多様なことばで表すことは、他者に対する共感的理解を促進すると考えられる。

最後に、小学生の年齢段階におけるより複雑な感情理解や、道徳性や規範意識の発達へのつながりについて述べる。前述した、Pons, et al. (2004) による感情理解能力をささえる9つの構成要素の中の、最後のComponentⅦとComponentⅨは、それぞれ、入り交じった複雑な感情の理解と、道徳的に正しい行動はポジティブな感情を生み、不道徳な行動やネガティブな感情を生むといった道徳性に関するものであり、おおよそ8歳頃からとされている。幼児期の間は自らの具体的経験に根ざした形で身近な他者の感情を理解していく。そして、多くの経験を積んでいくことを通じて、具体的体験ではないことについても思考が及ぶようになり、学童期における道徳性や規範意識の獲得へとつながる。従って、幼児期において、様々な他者と関わる中で迷いや葛藤がおきるような豊富な経験をつんでいくことが重要であるといえるだろう。

引用文献

- 朝生あけみ：幼児期における他者感情の推測能力の発達：利用情報の変化, 教育心理学研究, 35, pp.33-40, 1987.
- 麻生良太・丸野俊一：幼児における時間的広がりを持った感情理解の発達：感情を抱く主体の差異と感情生起の原因となる対象の差異の観点から, 発達心理学研究, 18, pp.163-173, 2007.
- 麻生良太・丸野俊一：時間的広がりを持った感情理解の発達変化：状況に依拠した推論から他者の思考に依拠した推論へ, 発達心理学研究, 21, pp.1-11, 2010.
- 林創：児童期における再帰的な心的状態の理解, 教育心理学研究, 50, pp.43-53, 2002.
- 畑山俊輝：幼児期における感情制御発達研究の現状と課題：久保論文, 森野論文へのコメント, 心理学評論, 53, pp.33-37, 2010.
- 浜名真以・針生悦子：幼児期における感情語の意味範囲の発達の变化, 発達心理学研究, 26, pp.46-55, 2015.
- 東山薫：4,5歳児における心の理論：誤信念課題と感情理解との関連, 聖心女子大学大学院論集, 23, pp.160-140, 2001.
- 東山薫：“心の理論”の再検討：認知と感情の関連, 聖心女子大学大学院論集, 27, pp.64-50, 2005.
- 東山薫：“心の理論”の多面性の発達, 発達心理学研究, 55, pp.359-369, 2007.
- 伊藤順子：幼児の向社会的行動における他者の感情解釈の役割, 発達心理学研究, 8, pp.111-120, 1997.
- 菊池哲平：幼児における自分自身の表情に対する理解の発達の变化, 発達心理学研究, 15, pp.207-216, 2004.
- 菊池哲平：幼児における状況手がかりからの自己情動と他者情動の理解, 教育心理学研究, 54, pp.90-100, 2006.
- 子安増生・木下孝司：「心の理論」研究の展望, 心理学研究, 68, pp.51-67, 1997.
- 近藤龍彰：幼児期の情動理解の発達研究における現状と課題, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 7, pp.97-111, 2014a.
- 近藤龍彰：幼児は「他者の情動はわからない」ことがわかるのか？：両義的状況手がかり課題を用いて, 発達心理学研究, 25, pp.242-250, 2014b.
- 久保ゆかり：幼児における矛盾する出来事のエピソードの構成による理解, 教育心理学研究, 30, pp.239-243, 1982.
- 栢田恵：幼児期における感情の理解と表情表現の発達, 発達心理学研究, 25, pp.151-161, 2014.
- 宮本祐子：表情偽装状況の理解における幼児の“心の表象理論”の利用, 心理学研究, 69, pp.271-278, 1998.
- 溝川藍・子安増生：5,6歳児における誤信念及び隠された感情の理解と園での社会的相互作用の関連, 発達

- 心理学研究, 22, pp.168-178, 2011.
- 文部科学省：幼稚園教育要領（平成29年告示）, フレーベル館, 2017.
- 森野美央：幼児期における心の理論発達の個人差, 感情理解発達の個人差, 及び仲間との相互作用の関連, 発達心理学研究, 16, pp.36-45, 2005.
- 森野美央：幼児期における感情理解, 心理学評論, 53, pp.20-32, 2010.
- Naito, M., & Toyama, K. : The development of false-belief understanding in Japanese children : Delay and difference? *International Journal of behavioral development*, 30, pp.290-304, 2006.
- 仲 真紀子：子どもによるポジティブ, ネガティブな気持の表現：安全, 非安全な状況にかかわる感情語の使用, 発達心理学研究, 21, pp.365-374, 2010.
- Pons, F., Harris, O.L., & deRosnay, M. : Emotion comprehension between 3 and 11 years : Developmental period and hierarchical organization, *European Journal of Developmental Psychology*, 1, pp.127-152, 2004."
- 笹屋里絵：表情および状況手掛りからの他者感情推測, 教育心理学研究, 45, pp.312-319, 1997.
- 櫻庭京子・今泉敏：2-4歳児における情動語の理解力と表情認知能力の発達の比較, 発達心理学研究, 12, pp.36-45, 2001.
- 澤田忠幸：幼児期における他者の見かけの感情の理解の発達, 教育心理学研究, 45, pp.416-425, 1997.
- 谷脇のぞみ・藤田尚文：幼児における「心の理論」課題, 他者感情理解と表情理解の関連について, 高知大学教育学部研究報告, 72, pp.109-123, 2012.
- 氏家達夫：発達研究が捉える感情は生ぬるくなってしまったのか？：久保氏, 森野氏, 坂上氏の論文に対するコメント, 心理学評論, 53, pp.56-61, 2010.
- Wellman, H. M., Cross, D., & Watson, J. : Meta-analysis of theory-of-mind development : The truth about false belief, *Child Development*, 72, pp.655-684, 2011.
- 山村麻予・辻本耐・中谷素之：幼児期における実行機能と他者感情理解の関連性, 大阪大学教育学年報, 16, pp.59-71, 2011.
- 吉川詩織・島義弘：幼児の感情理解と心の理論：故意性の推測と悲しみ・怒りの弁別, 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 26, pp.55-64, 2017.